

# 『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第20回 第6.2.4節～第6.2.6節

2018年10月15日

小田 勝

167頁「6.2.4 否定繰り上げ」では、類例をあげておく。

- ・捨てたれど隠れて住まぬ人になれば (=隠レテ住ム人ニナラネバ) なほ世にあるに似たるなりけり (山家集)

第6.2.4節の後に、次のような節を追加したい (今のところあまりよく書けていないが)。

---

## 6.2.4' 尺度性のある語の否定(新設)

尺度性のある(スケールをもつ)語の否定は、「大きくない→普通である/小さい」のように、単に「高尺度合いでない」の意と、「反対の極にある」の意とをもつ。古語の「憎からず」は、「嫌ではない」の意ではなく、一般に、反対の極、「好感がもてる」の意を表す。

---

「6.2.5 否定と肯定が同意になる現象」の169頁の用例(16)について。次例①の「怪しからぬ」は「悪くない→素晴らしい」の意で、②の「怪しかる」も①と同意である。

①御堂供養といひしことこそ、女房の装束怪しからぬことなりしか。(たまきはる)

②あまり歌の詠まれ候はぬに、怪しかる物見てをかしとも思はば、もし秀句事などもせられ候ふかとゆかしくて(土御門院百首・定家卿返事)

「思はぬほか」「思はざるほか」は、「思ひのほか」の意である。

- ・かかるほどに、思はぬほかに、仁治三年の秋八月十日あまりのころ、都を出でて東<sup>あづま</sup>へおもむくことあり。(東関紀行)

- ・[定家ガ] このたびの御百首の召しにまかり入らずなり候ひにける、思はざるほかの憂へ嘆きに候ふなり。(正治二年俊成卿和字奏上)

次例は、「障子が長い間開かなかった」の意であるから、「御障子開かぬこと、無期になりぬ」と同意である。

- ・御障子立てて、「御扇鳴らせ給へ」と[中宮ガ帝ニ]申させ給ひければ、[ソノ後] 御障子開くこと、無期になりぬ。(讃岐典侍日記)

「晴れ間」は「晴れている間」の意（「長雨、晴れ間なきころ」源・帚木）であるが、「雨間」もまた「雨の降らていない間」（「雨間も見えぬ五月雨のころ」続後撰 212）で、「晴れ間」の意である（「雲間（＝雲ノナイ間）」「人間（＝人ノイナイ間）」も同様の構成）。

「空聞き」と「空聞かず」（「いかに人申すとも、そら聞かずして」平治）は同意である。「数なし」は「数少ない」の意と、「数限りない、無数である」の意とがある。また、「恥無し」は「恥ずかしくない→素晴らしい」の意と、「恥を知らない→厚かましい」の意とがある。

ここで、文法の問題から外れるが、反転する意義を併せもつ語をあげてみよう。

- ・動詞「ささふ」（下二段）：防ぎとめる、守る／妨害する、攻める
- ・動詞「闌く」（下二段）：盛りになる／盛りが過ぎる
- ・形容詞「いたし」：素晴らしい／苦痛である
- ・形容詞「はしたなし」：中途半端である／鋭い、大したものである
- ・形容動詞「尋常なり」：普通である／素晴らしい
- ・名詞「以往」：ある時より後（以後）／ある時より前（以前）
- ・副詞「かつがつ」：どうにかこうにか、やっとな／早くも

「あさまし・いみじ・えも言はず・希有なり・めざまし・ゆゆし・わりなし」などは、善悪両方に用いられて、「ひどい」の意と「素晴らしい」の意とがある。副詞「頗る」はもと「少ない」の意であったが、中世前期に「甚だ多い」の意を生じた。

170 頁「6.2.6 肯否の誤用」。次例は、「人やりにあらなくに（＝自分カラシタコトナノニ）」の意である。

- ・人やりにあらぬことにもあらなくに身もいたづらになりぬべきかな（信明集）〈中務集ハ「人やりと思ふことにもあらなくに」ニ作ル〉

171 頁用例(5)～(7)は、「…よりほか」と同意の「…ずよりほか」の例で、§ 14.1.7をも参照。用例(10)について、次例も反語の文を「…ならず」の形で続けている。

- ・「さればよ」と〔源氏ハ〕思せど、何かはそのほどのことあらはしのたまふべきならねば、しばしおぼめかしくて（＝曖昧ニシテ）（源・横笛）
- ・人柄、世のおぼえもなべてならずものし給へば、何事かは飽かぬことあるべき御身ならぬに（とりかへばや）

（補遺稿第 19 回 45 頁 5 行目の「正統な根拠無く」は「正当な根拠無く」の誤記であった）

〔出典追加〕土御門院御集①土御門院（1195-1231）②新編国歌大観 7